

自己評価	外部評価	項目	自己評価		外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容	
1. 理念に基づく運営						
1	1	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	経営者が変わった時に職員と一緒に理念や方針を作り毎年全員で共有するようにしており、年度毎に各棟の目標を決める際にも理念や方針を基に全員で話し合っている。	職員は経営理念と方針を共有し、毎年振り返りを行い、棟ごとの目標を設定し、理念、方針と共に事業所内に掲示し、支援に専念している。		
2	2	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	感染症対策前は入居者や家族、職員が地域の方々と一緒に多くの活動をしていたが、現在は管理職が代表して交流を図っている。	感染症対策として、催し等交流機会が減少しているが、日課の散歩の際に、毎日地域住民と会話をしている。また、自治会に加入しているほか、認知症カフェを主催する等、地域住民と交流している。		
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	感染症対策により活動は限定されてしまっているが、それでも認知症カフェを継続して地域の方々と交流や発信の場としても活用している。			
4	3	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	感染症対策のため書面で送付し、以前のように入居者や家族も集まって開催することはできないが、行政機関や地域の方々から少しずつ人数を増やしていき、従来通りの再開を目指している。	感染症対策のため書面開催としていたが、直近は行政機関を含めた集合形式で開催している。家族からの意見は来所・電話応対時に伺った内容を、会議等で報告し共有されている。		
5	4	○市町村との連携 市町村担当者や日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	地域包括支援センターや社会福祉協議会、各機関の介護支援員等と密に連携が図られており、施設だけでなく認知症カフェや研修といった面でも協力関係を築くことができている。	自治会総会、地域ケア推進会議に出席しており、また、認知症カフェや運営推進会議に行政職員も参加する等、協力関係を築き取り組まれている。		
6	5	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	毎年、代表者が外部研修に参加しており、最新の情報を基に内部研修で共有し、理解と防止に努めている。その学習を基に毎月の幹部及び職員会議でも検討しており、入居者はもちろん職員の精神的な面も含めて未然に防げるよう取り組んでいる。	毎年、代表者が外部研修に参加し、その内容は内部研修を通して職員に共有されている。また、年二回の身体拘束防止委員会、月例の職員会議内で身体拘束について取り上げ、理解と防止に努めている。		
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃されることがないように注意を払い、防止に努めている	身体拘束防止と同じく毎月の幹部及び職員会議で共有や検討が図られており、職員一人ひとりの意識を高めることで防止に努めている。			
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用	本年度ご逝去された入居者が成年後見制度を利用			

		管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	しており、管理職が事業や制度について学んだことを内部研修で職員全員に共有している。日頃接する機会が少ないので今後も研修していきたい。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	施設長が利用開始前に説明し、改定があれば毎月の送付物に同封して書面で説明している。質疑等があれば個別に対面や電話等で対応している。		
10	6	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	都度、個別に伺った内容を管理職で共有し、検討の上で運営に反映している。	家族からの意見・要望について、その都度管理職に報告し、共有、検討を行っている。また、月例の職員会議で個人別に情報共有を行い、運営に反映させるよう努めている。	
11	7	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員会議でも意見や提案を言いやすい雰囲気がある、それ以外の場面でも気軽に話しており、反映されている。	日常的に、職員間で意見を出し合い、気付いたことについては都度管理職で検討を行い、運営に反映させるよう努めている。また、月例の職員会議では、全職員発言する場を設けている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	処遇改善加算（支援）等、仕組みがわかりにくいことや気になったことは施設長や管理者・主任に尋ねており、各職員が向上心を持って働きやすい環境にある。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	感染症対策のため外部研修に職員が参加することは難しいが、管理職が外部研修等で学んだことを内部研修で職員に共有しており、日々のケアに取り入れられている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	感染症対策のため交流の機会を設けることは難しいが、地域ケア会議に参加したり、地域の介護支援員と交流を図ったりして連携や向上に努めている。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	利用開始後は特に強く不安を感じる入居者が多いので、感染症対策中も1ヵ月は自由に面会できるようにし、家族との関係を保ち、職員との連携も密にできるよう図っている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	お互い同じ地域で暮らしており、入居者や家族と職員が顔見知りである場合が多い。それによって申込む前から施設や勤務時間以外でも気軽に話せる関係ができておりケアに生かされている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスの利用を開始する段階で、本人と家族等が「そ	家族との連携が密に図られているので、その時に必要としている支援を各々に提供しやすい環境が		

		の時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	つくられている。施設だけで対応できない時も関係各所と連携を図って対応している。		
18		○本人と共に過ごし支え合う関係 職員は、本人を介護される一方の立場に置かず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	いつでも使える場所に掃除用具を置く等して入居者が自分から活動できる環境をつくり、在宅時の生活や残存機能を生かせるようにしている。		
19		○本人を共に支え合う家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場に置かず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	面会が多く、電話やLINEでも連絡をとり合い、本人や職員が家族との絆を日常的に保てるよう図っている。担当者直筆のお便りや手紙も送っており、親しみを持ってもらっている。		
20	8	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	家族が遠方に住んでいても友人や知人が訪ねて来る入居者もあり、手紙や電話、面会室等を活用しながら関係が保たれている。	入居時には本人・家族から生活状況を聞き取り、関係を継続できるように支援している。個別対応できる面会室を活用し、家族以外にも友人や知人と面会する機会を設けている。また、連絡手段として、電話以外にLINEを活用する等、継続的な関係維持に努めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	集団での活動が好きではない入居者もいるが、散歩や歌、ゲーム、創作といったレクリエーション活動を通して自然とコミュニケーションが図られるようサポートしている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用（契約）が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入居者のご逝去した後も家族が施設を訪れて馴染みの入居者や職員と話していたり、運営推進委員になって継続的に関わってくれたり、相互にサポートし合うことができています。		
III. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	9	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	一人ひとりと話す時間を大切に、本人の希望や意思を把握することでケアや問題を明らかにして本人の立場で対応するよう努めている。	入所契約時に家庭訪問を行い、本人や家族の希望を聞き取っている。また、日常支援の中で随時本人の意向をくみ取り、利用者の意思反映に努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	在宅時に使っていた物を施設に持って来て頂き、入居するまでの生活や環境に近いケアを提供できるよう努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	体を動かし、他者の役に立つ喜びが精神的な安定につながる入居者もあり、家事等の活動を生かしたケアを工夫している。		
26	10	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	毎月の職員会議で担当者が中心になってモニタリングを行い、短期・長期の目標にそって全員でケアプランの評価や改善を検討している。	利用者一人ひとりに担当がついており、月例の職員会議、棟ごとの会議の中で、担当職員やケアマネージャーで情報共有し、現状に即した介護計画を作成	

				し、介護に反映するよう努めている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個人の記録や日誌に毎日の様子を記載し、日勤と夜勤の入れ替わり時には口頭での申し送りも合わせて行い、職員間で情報を共有しながらケアしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	認知症カフェやショートステイも始まり、地域の行政機関や医療機関にも協力して頂きながら個々のニーズに応じたケアやサービスの提供に努めている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	感染症対策前は地域の行事や買い物、外食にも積極的に行っていた。現状でも花見や栗拾い、神社の山車巡行見物を実施できている。		
30	11	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	隣接した山田クリニックが隔週で往診に来ている。日高徳洲会病院を定期受診している入居者もあり、高齢の家族に代わって職員が同行して通院をサポートしている。	隣接した協力医療機関があり、日々医療関係者と情報共有を行っており、また、協力医療機関以外にも、本人のかかりつけに合わせて受診時の支援を行っている。医療に関する記録を一元管理しており、随時家族と連絡調整を行い情報共有を図り、適切な医療を受けられるよう支援に努めている。	
31		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	24時間体制でかかりつけ医や看護師が対応してくれるので、変化があった時は、その都度相談して必要な診察や検査等を受けることができている。病院が隣接しているので日常的な情報共有もできている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。又は、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	家族やかかりつけ医、先方の病院と連携し、安心して入院できるようにしている。また、施設でリハビリや経過観察できる体制をとり、早期に退院できるよう連携を図っている。		
33	12	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	元気な時から主治医を交えて本人や家族と話し合いをもち、施設での看取り介護に理解を得た上で本人と家族の気持ちに寄り添った支援ができるようチームケアに努めている。	申込み時に本人や家族より終末期のあり方について確認を行い、希望に沿うよう支援に取り組んでいる。日ごろから医療機関等関係機関と連携し、これまで9割以上看取りを行っている。また、毎年看取りの内部研修を行い、支援向上に努めている。	
34		○急変や事故発生時の備え	怪我や感染症に関する内部研修や消防署での救急救命講習を毎年行っており、万が一の際には実践		

		利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	できるよう努めている。		
35	13	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	感染症対策中も消防署員の立会いをお願いし、想定を変えながら年2回の避難訓練を実施している。	感染症対策により、自治会の避難訓練は欠席となるが、地震・火災・水害を想定した避難訓練を年二回実施している。非常食の備蓄、避難場所の確認等、災害対策に取り組んでいる。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	14	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	排泄や入浴といった特に自尊心への配慮が必要な場面をはじめ、一人ひとりの尊厳を大切にしながら言葉かけや対応に努めている。	職員会議や内部研修において、プライバシーの配慮、人格の尊重について意識向上を図っている。入浴は個別浴にて実施している。また、個別に合わせた対応について全職員で共有し、適切な支援に努めている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	都度、本人に希望や要望を伺って自己決定できるようにし、自分の考えや希望を伝えやすい関係や環境づくりに配慮している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	例えば、入浴を好まない入居者は多く、無理強いせず臨機応変に対応している。その時の気分や体調に合わせた本人本位の考え方や関わり方を大切にしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	服を選んだり化粧をしたり、選択と決定を自分でできるよう支援している。理容師の訪問もお願いしており、定期的に整髪できている。		
40	15	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	自分で食べることを楽しむケアを大切に、誕生日や行事をはじめ日常的に入居者が食べたい物を提供している。食器や食卓を職員と一緒に拭く等の家事にも積極的に取り組んでいる。	調理専門職員を配置しており、経口摂取に配慮し、食べる楽しみを優先している。食事の準備、片付け等も利用者と職員と一緒に取り組んでいる。コロナ禍において食事が主な楽しみとなっていたため、利用者の希望に極力沿うよう、メニューを工夫する等取り組んでいる。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるように、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	毎食の摂取量を記録しており、個人の嗜好や咀嚼の状態と合わせて量や形状等を検討している。水分の摂取量も把握しているので、不足している時は好きな飲み物を提供する等の工夫をしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後に口腔ケアを促しており、個人の状態に応じて歯ブラシや義歯ブラシ、マウスウォッシュ等を変え、自力や介助の程度も一人ひとりに合わせ		

			て変えている。	
43	16	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立におむつを使った支援を行っている	記録を基に一人ひとりの排泄の量や間隔を把握し、促しや介助することでできるだけ布製の下着を使っている。パットを使う際も適量となるよう調整し、失禁やおムツ使用がないようにしている。	個別に排泄パターンに関する記録をつけており、個々に合わせて自立に向けた支援に取り組んでいる。ほとんどの利用者は布パンツを使用し、おむつ使用は最低限に留めている。
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎日30分程度の運動を行っており、楽しみながら適度な刺激が得られるようにしている。また、飲食物を工夫することで排便されるようにしている。	
45	17	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	本人ができることはそれを生かし、洗えない部分を介助している。入浴中は昔の話を引き出す等して会話するよう努め、リラックスして楽しめるようにしている。	利用者に配慮し、入浴は担当職員が一对一で介助しており、頻度や時間も個々に合わせて支援している。また、入浴剤を変える等、楽しむ工夫をしている。
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々の状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	自室でテレビを見たり新聞を読んだり思い思いに過ごしている入居者が多く、各人のペースで休息や昼寝ができています。	
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	一人ひとりの使っている薬を個人の記録と共に綴り、常に毎日の健康状態と合わせて確認できるようにしている。変化があればかかりつけ医や隣接した薬局にすぐ相談している。	
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	食事の準備や片付け、掃除等の家事活動を積極的に取り組む入居者が多く、各人に合わせた役割を用意している。また、自室で食べるおやつや趣味の道具も用意し、余暇を楽しめるようにしている。	
49	18	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	現在は外出や帰宅が困難になっているが、季節を感じられるよう花見や栗拾いへ行ったり、雪が降るまでの間は地域を散歩して住民と触れ合いながら草花を摘んだりできるような機会を増やす工夫をしている。施設内で夏祭り（縁日）やクリスマス会等の行事を新たに企画し、楽しみを継続している。	毎日散歩を行い、外出機会を設けている。コロナ禍前は家族宅への外出や買物も行っていたが、現在は車内から桜の見学を行う等、感染症対策を行いながら、出来る範囲の外出支援に努めている。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	家族と協力し、自分で金銭や財布を持っている入居者もいる。しかし、感染症対策前は買い物へ行くこともできていたが、現在は困難になっている。	
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	遠方の家族から電話をもらう入居者には個室でゆっくり話せるよう支援し、手紙を書ける入居者には投函するまでの支援をしている。	
52	19	○居心地のよい共用空間づくり	温かみのある空間になるよう入居者が創作活動	共有スペースには、ひな人形、

		共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激（音、光、色、広さ、温度など）がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	（ボランティア主催の手芸クラブ）で作った季節感のある作品を都度入れ替えながら飾っている（入れ替えた後は自室にも飾っている）。マニュアルを基に温度を調整したり、入居者が不快になる音を生じたりしないよう配慮している。	こいのぼり等季節に合わせた飾りや、利用者自身の作品展示等を行っている。また、温度計・湿度計を用いた環境管理、光が苦手な利用者にはカーテンを引く等環境に配慮している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ホール以外に多目的室や廊下にソファを設けることで、各々が好きな場所で気の合う方と（あるいは一人で）したいことができるようにしている。		
54	20	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	自室には在宅時から慣れ親しんでいる家具や道具、家族等の写真を持って来て頂き、配置にも工夫することで使いやすく居心地の良い部屋になるよう努めている。	自宅で使い慣れた家具を持ち込み、好みに合わせて配置を行っている。また、趣味の作品や思い出の写真を飾る等、本人の居心地が良い居室づくりを工夫している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	テーブルや椅子、手すりの配置等を工夫して安全を確保すると共に、過剰すぎず、必要な掲示をすることで入居者が見て、自分で行きたい場所へ行き、したいことができるよう配慮している。		